

[Report]

Countermeasures for infection during the Japan Ground Self-Defense Force's disaster deployment in the COVID-19 pandemic

Makoto Sato* and Ayumi Nisigami**

* Aino University Junior College

** Aino University

Abstract

In October 2020, the COVID-19 pandemic became an unprecedented crisis with over 43 million infections and more than 1.1 million deaths worldwide. In response to this national emergency, the Ministry of Defense conducted disaster deployments of the Self-Defense Forces to strengthen border measures and to the Diamond Princess cruise ship. Research objective: To elucidate the reality of the infection control measures implemented by the Self-Defense Forces on the Diamond Princess, covering both inside and outside the ship. Research method: The initial plan was to survey 100 Self-Defense Force personnel who had served in the same unit for more than five years; however, due to the impact of the pandemic and personnel reassignments, the survey was limited to only five individuals designated by the Joint Staff Office. Consequently, two additional studies were conducted. The second study involved an analysis of books written by Self-Defense Force members, and the third was a correspondence analysis using codes extracted from both the questionnaires and the books. Results: The study highlighted the importance of strict protective measures and the thorough implementation of basic and foundational practices in the infection control efforts conducted by the Self-Defense Forces. The example of the Self-Defense Forces offers valuable lessons for future infectious disease control and crisis management.

Key Words: COVID-19, Self-Defense Forces, disaster deployment, qualitative descriptive study, literature analysis, Diamond Princess

コロナ禍での陸上自衛隊の災害派遣での感染対策活動

—— ダイヤモンド・プリンセス号派遣隊員へのアンケート及び書籍分析 ——

佐 藤 真*, 西 上 あゆみ**

【要 旨】

新型コロナウイルス感染症は2020年10月全世界で4300万人以上の感染者、110万人以上の死者が発生するような未曾有の事態となった。この国難に対し防衛省も水際対策強化に係る自衛隊の災害派遣、ダイヤモンド・プリンセス号への災害派遣などを行った。研究目的：自衛隊が行ったダイヤモンド・プリンセス号での感染対策について船内、船外の場面を通して、その実態を明らかにする。研究方法：対象は5年以上同一部隊で勤務している自衛官100名を予定していたが、コロナ禍の影響と転属により、統合幕僚監部から指定された5名のみアンケートが限定された。そのため、2つの研究を追加した。2つ目として自衛隊員による書籍の分析を行い、3つ目はアンケートと書籍からコードを抽出し対応分析を行った。結果：自衛隊の行った感染対策、特に厳格な防護措置、基本・基礎の徹底の重要性を浮き彫りにした。自衛隊の例は、将来の感染症対策と危機管理における貴重な教訓を提言する。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、自衛隊、災害派遣、質的記述的研究、文献分析、ダイヤモンド・プリンセス号

I. は じ め に

新型コロナウイルス感染症は2020年10月には全世界で4300万人以上の感染者110万人以上の死者が発生するような未曾有の事態となった（日本放送協会（NHK）NEWS WEB, 2020）。我が国の政府も国民と共に万全を期するべく取り組み、防衛省・自衛隊も水際対策強化に係る災害派遣、市中感染拡大予防のための災害派遣、ダイヤモンド・プリンセス号への災害派遣などを行った。

2020年1月20日に横浜港を出港したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の乗客で、1月25日に香

港で下船した80代男性が新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に罹患していたことが2月1日確認された（国立感染症研究所）。このことで、ダイヤモンド・プリンセス号へは陸上自衛隊の派遣が行われた。陸上自衛隊は、対特殊武器衛生隊が担当しており、対化学兵器、生物兵器の専門集団である。陸上自衛隊では一般の隊員であっても基礎の訓練において戦闘防護衣や防護マスクの装着、除染といった訓練を行っており、ダイヤモンド・プリンセス号での活動においても基本的な感染予防策について習熟していたと考えられる。当時は、衛生資材の面において物的な不足は考えられないときであったが、病院や医療施設などからダ

* 藍野大学短期大学部 第二看護学科

** 藍野大学大学院 看護学研究科

イヤモンド・プリンセス号に派遣されていた要員から、数人の感染の報告はされており、感染対策に万全を期していたとしても、感染を完全に防ぐことは難しい。一方、同時期に派遣された陸上自衛隊は4900人を派遣しながらも感染が発生しなかった。この要因は何であったかについて説明される必要がある。

II. ダイヤモンド・プリンセス号と自衛隊の活動

2020年初頭、新型コロナウイルス（COVID-19）は中国・武漢市から始まり、急速に世界中に広がった。このウイルスは、SARS（重症急性呼吸器症候群）と同様に冠状ウイルスの一種であり、人から人への感染が可能であった。初期の症状には発熱や咳、呼吸困難などがあり、重症化すると肺炎を引き起こすことがあった。日本では、2020年1月16日に新型コロナウイルス感染症の初ケースが報告され、その後、感染は国内外で拡大し続けた。ダイヤモンド・プリンセス号は、2020年2月初旬、新型コロナウイルスのクラスター発生で世界的な注目を集めた。この豪華クルーズ船は、香港で下船した男性客の新型コロナウイルス感染が確認された後、横浜港に到着し、船上で厳密な検疫が行われた。乗客乗員合わせて3711人が乗船しており、乗客は主に個室で隔離され、乗員は限られた者のみが通常業務を続けた。

陸上自衛隊によるダイヤモンド・プリンセス号への派遣は3週間、延べ人数2700名で隊員の感染は報告されなかった。防衛省からの任務として、ダイヤモンド・プリンセス号では医療支援、生活支援、下船者の輸送業務、現地避難所の開設が行われた。感染者への対応として、医療支援、生活支援、船内共同区画の消毒、下船者輸送支援が行われていた。防衛省の発表（防衛省HP、2020）によると、1）基本の徹底：①手指消毒 ②マスクの付け方・外し方の徹底 ③1日の任務後、感染のリスクの高さに応じて、洗濯を実施する、2）防護の徹底：①自衛隊独自の防護基準を適応 ②2人1組での行動とする、3）3食の食事と休養・免疫力向上をする、4）活動拠点としての民間フェリーを活用する。

III. 研究 I

1. 目的

自衛隊が行ったダイヤモンド・プリンセス号での感

染対策について船内、船外の場面を通して、その実態を明らかにする。

2. 研究方法

自記式自由記載のアンケートによる質的な調査研究

3. 調査対象

調査対象は、5年以上同一部隊で勤務している自衛官（陸曹以上）を予定していた。これは、5年以上の勤務経験があり陸曹以上であれば、現場での指揮権を持ち、指揮決定に寄与できると考えられるためである。また、災害派遣には複数の部隊から派遣されているが、研究者が自衛官時代に所属していた部隊から派遣された隊員は100名と情報を得ていた。そのため研究を計画した当初は、100名に対してアンケートを行う予定であった。しかし実際には、コロナ禍による経年により、隊員の移動があり、統合幕僚監部によって指定された5名に限定されてしまった。そのため5名にアンケートを配布し5名から回収できた。

4. 調査内容

- 1) 対象者の属性：(1) 性別 (2) 自衛隊経験年数 (3) 階級
- 2) ダイヤモンド・プリンセス号で勤務した隊員が感染予防に留意した状況や場面の自由記載。
- 3) 同船への災害派遣で感染者が0（ゼロ）であった要因についての自由記載。

5. データ収集期間

2021年2月から2022年3月

6. データ収集方法

本研究では、ダイヤモンド・プリンセス号に災害派遣された自衛官・看護官約100名を対象に、自記式自由記載のアンケート調査を予定していたが、5名からの回収となった。回収の手順は以下の通りである。

まず、防衛省広報班に研究の趣旨と協力を依頼し、その指示により駐屯地の広報班に連絡を取り、派遣部隊の部隊長と直接連絡を取るためのメールアドレスが提供された。

その後、部隊長にメールで研究協力を依頼し、研究の依頼書を作成して、再度電話とメールにて研究内容を説明した。メールの返信で、派遣された部隊長から研究協力は駐屯地の広報を通じて行うよう指示されたため、駐屯地の広報班に連絡をした。しかし、派遣部

隊は複数に渡り転属した隊員も存在するため、1つの駐屯地では対応が難しく、防衛省統合幕僚監部の広報課が紹介された。

統合幕僚監部の広報担当官と電話で調整を行い、研究の趣旨、目的、方法、アンケート内容を説明し、書面をメールで送付した。その結果、広報課長の承認を得て、担当官から研究協力の承諾を得ることができた。担当官を通じて派遣部隊に研究協力の依頼が行われ、必要なアンケート用紙を研究者が準備し担当官から5名の隊員に配布された。

アンケートの回答は派遣部隊から通送にて担当官に届けられ、担当官から、統合幕僚監部の広報課長に渡り、検閲を経て、最終的に研究者の手に郵送で届けられた。

7. 分析方法

感染を予防するために留意したことや感染が0（ゼロ）になった事への要因について記述した内容を以下の手順に沿って質的帰納的に分析した。アンケートの自由記載に対してKH Coderを用い、自衛隊の感染を予防するための状況や意味のあるキーワードを抽出した。キーワードから頻出回数及び共起ネットワークを用いて分析した。

8. 倫理的配慮

自衛隊での研究について、すでに防衛省広報室より許可をもらい各駐屯地の広報班の許可を得れば調査・研究を行って良いと許可を得て実施した。個人情報保護の誓約書を交わし公開時には配属年数と階級のみとした。調査時には氏、階級を聴取するが匿名化することで個人が特定できないものとした。得られた情報は調査が終了後シュレッダーにて破棄を行うこととし、藍野大学短期大学部倫理審査委員会の承認を得て、調査を行った（承認番号：藍短倫20006）。

IV. 研究 II

1. 目的

自衛隊で行っていたダイヤモンド・プリンセス号での感染対策について船内、船外の場面を通して書籍の分析を行い、その実態を明らかにする。

2. 研究方法

書籍「コロナ下の奇跡」の文面から、ダイヤモンド・プリンセス号で行われていた実際の活動を句点を

基準にコード化し質的に分析を行う。

3. 分析方法

書籍「コロナ下の奇跡」からダイヤモンド・プリンセス号での実際の活動をコード化し、コードからテキストを作成する。そのテキストをKH Coderを用いて頻出語及び共起ネットワークを用いて分析する。

4. 倫理的配慮

書籍「コロナ下の奇跡」の著作権者である石高氏には出版社を通じて本人より使用の許可を得ている。

V. 研究 III

1. 目的

アンケートの内容と書籍にある活動の内容を分析し、実際に活動を行った自衛官の感染対策の留意点を抽出する。

2. 研究方法

アンケートから作成したコードと書籍「コロナ下の奇跡」から作成したコードを用いて質的に研究を行う。

3. 分析方法

アンケートから抽出したコードをテキスト化し、そのテキストと書籍から抽出したコードをテキスト化する。2つのテキストをKH Coderにて対応分析を行い現場の隊員と書籍内の関連性について分析する。

VI. 結果および考察

1. 研究 I : アンケート調査

1) アンケートの頻出語 (表1・表2)

アンケートに協力した隊員は5名で、その内訳は幹部1名、陸曹4名だった。自衛隊勤続年数15年以上の隊員は部隊においては、中堅もしくはそれ以上の隊員となる。現在の部隊の勤続年数は3年から5年であり、勤務の特殊性上、転属が多いのは妥当な数値であった。ダイヤモンド・プリンセス号における自衛隊の感染予防活動は、個人防護具の使用と消毒作業の徹底によって特徴づけられた。自衛隊ではタイバックスーツやフェイスシールド、ブーツカバーなどを個人防護具と称する。これは、自衛隊の教育科目にある「特殊武器防護」による個人用防護具からの影響だ。個人用防護具は、面体・吸気管等からなる防護マスク。

表1 アンケート結果

	A	B	C	D	E
性別	男	男	男	男	男
派遣時の階級	幹部	陸曹	陸曹	陸曹	陸曹
現部隊配属年数	2年9カ月	3年	5年	5年	5年1カ月
自衛隊勤続年数	25年1か月	27年	15年	22年	20年1カ月
普段の訓練（特殊武器防護）は役にたったか	役にたった	役に立った	役に立った	役に立った	役に立った
未知のウイルスに対する不安はなかったか	少しは不安だった	あまり不安ではなかった	少しは不安だった	少しは不安だった	あまり不安ではなかった
指示されたことを励行することで感染は防げたと思うか	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う
感染予防に留意した状況や場面	一処置一手指消毒。厚生労働省の感染対策専門家と相談して検体採取場所（船内浴場脱衣所）の環境設置を行った（換気、処置毎に個人防護具の交換を行った、のれんの除去）。船内浴場脱衣所での検体採取の際に船内で定められた個人防護具の着用基準に加えて、さらに厳格な個防護具着用を行った。（ヘアキャップ、フェイスシールド、N95マスク、長袖ガウン二重着用、手袋二重着用）。周辺環境消毒作業員配置。シフト勤務（疲労で業務に支障がでないようにするため）。はくおう宿泊時の個室管理や生活用品の個人毎の供与。体温や症状の経過観察記録への記入と会議での健康状態チェック。	不潔、清潔の区分を明確にし、不潔から清潔に入る時の個人防護具の着脱や消毒の徹底及び統制。	待機場所の入り口と出口を分け手指消毒を確実にに行った。	手指消毒を各入口等で出入りの都度実施した。マスクは定期的に交換した。個人防護具着用の際はパディでチェック等を実施。	その都度、その都度、アルコール消毒を実施していた。
派遣された隊員に感染者がゼロだった要因	こまめな手洗いや手指消毒。個人防護具着脱要領の徹底。自衛隊独自の防護基準。二人一組での活動。休養と栄養。	基本基礎の徹底。	個人防護具の着脱を確実に行う。手指消毒の徹底。	感染防護をしっかりと実施していたからだと思う。手指消毒を徹底的に実施していたと思う。	

表2 アンケート結果頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
消毒	9	船内	3	交換	2
防護	9	着脱	3	採取	2
個人	7	チェック	2	思う	2
指	6	マスク	2	処置	2
行う	5	確実	2	場所	2
実施	5	感染	2	清潔	2
手	5	環境	2	脱衣	2
着用	5	基準	2	不潔	2
徹底	4	検体	2	浴場	2

ブーツや手袋、フードなどからなる防護衣で構成され、それぞれ隊員に貸与されている。そのため、防護具といえば手袋やフェイスシールド、タイベックスーツなどを防護具と共通で認識していた。

キーワードで多いものは「個人防護具」、「手指消

毒」、「感染防護」、「環境設置」、「シフト勤務」、「厚生労働省」、「はくおう」などである。これらの単語から、新型コロナウイルスに対応するための感染防護策がどのように実施されたかが読み取れた。自衛隊はダイヤモンド・プリンセス号のような密閉空間での感染リスクが高い環境下において、現地の厚生労働省の専門家と協力し、感染防護策を徹底していた。具体的には、検体採取場所である船内浴場脱衣所において換気の改善、処置毎の個人防護具の交換、不要なのれんの除去を行うなどの環境設置を行い、厳格な個人防護具の着用基準を設け、ヘアキャップ、フェイスシールド、N95マスク、長袖ガウン、手袋の二重着用などを実施し、疲労を軽減するためのシフト勤務を採用した。

宿泊施設「はくおう」では、個室管理や生活用品の供与によって隊員の健康を守り、体温や症状の経過観察を徹底した。手洗いや手指消毒、個人防護具着脱要

領の徹底、不潔と清潔の区分の明確化、個人防護具の着脱時のバディチェックなど、基本的な感染防護措置を常に行い、それによって隊員の感染0（ゼロ）を達成した。

クルーズ船という密閉された空間での感染拡散の特徴が示された。クルーズ船は、人々が長期間密接に接触する環境を提供するため、感染症の伝播にとっては理想的な場所となり得る。この事例では、空気循環システム、共有スペース、乗客と乗員の相互作用が、感染拡散に大きく影響した。また、無症状の感染者がウイルスを広げる可能性が明らかになり、これにより、症状が出ていない人々に対するスクリーニングと隔離の方針が見直されたと考える。

2) アンケートの結果 共起ネットワーク分析 (図1)

KH coder を用いて最小出現数2、上位60に設定し共起ネットワーク分析を行った。共起ネットワークでは大きな円がより頻繁に登場するキーワードを示し、実線でつながっているキーワード間には深い関係があることを意味する。点線は、キーワード間に、ある程度の関連はあるものの、実線ほどの強い関係は示さないことを示す。

キーワード「個人」と「防護」、「消毒」が中心に位置し、最も大きな円で表されていることから、個人における感染対策がデータセットにおいて非常に重要であり、多くの他の要素と関連していることが示された。「検体」は「採取」、「浴場」と「感染」に直接的な関連を持ち、船内活動の文脈で共に感染対策として用い

られることが多いことを示した。このデータセットでは個人の防護行動が感染対策において重要な役割を果たしていることが示された。

その他のキーワードは、データ量が少ないためサイズが小さく、点線でつながっているものもあるが、これらは「感染」「対策」「自衛隊」と関連はありつつも、中心的なテーマほど頻繁には言及されておらず、関連性が弱い。

2. 研究Ⅱ：KH coder を用いた書籍頻出語分類

1) コロナ下の奇跡からの頻出語 (表3)

書籍「コロナ下の奇跡」から頻出キーワードを KH coder を用いて分析した。頻出語句 (表3) から自衛隊によるダイヤモンド・プリンセス号における新型コロナウイルス対応の詳細な取り組みを頻出語とその使用回数に基づいて分析を行い、自衛隊の活動の各側面をカテゴリごとに分類した。その結果、感染対策、支援活動、運用管理、情報共有と訓練、病原体対策、健康管理、汚染対策に大別された。自衛隊の感染対策への取り組みのキーワードは、防護服の着用 (11回)、消毒作業 (16回)、マスク (7回) や手袋 (6回) の使用、清潔さの維持、アルコール消毒 (7回) といった措置に注力した。これらは、感染リスクの最小化に寄与し、船上での安全を確保する重要な役割を果たした。支援活動についてのキーワードは医療支援 (15回)、災害対応 (13回)、患者搬送 (7回)、救急対応 (7回) など、多岐にわたる支援活動 (33回) を通じ

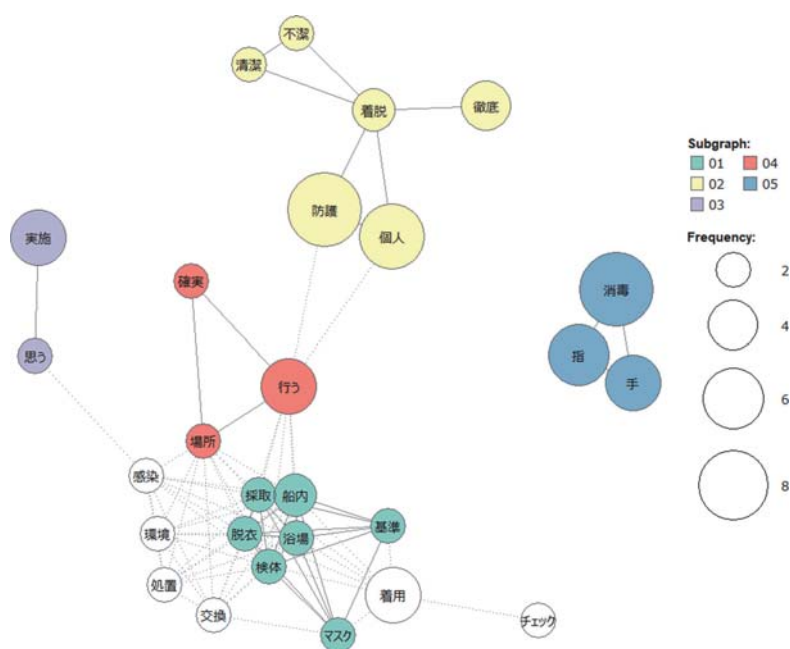


図1 アンケート共起ネットワーク

表3 コロナ禍の奇跡頻出語表

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
感染	68	現場	10	労働省	7	多い	5
隊員	59	方面	10	インフルエンザ	6	東部	5
自衛隊	40	チェック	9	リスク	6	東北	5
防護	35	マスク	9	運転	6	到着	5
支援	33	看護	9	確実	6	難しい	5
衛生	27	乗員	9	基準	6	発生	5
活動	27	場所	9	検体	6	病院	5
DP	26	清潔	9	採取	6	武漢	5
消毒	25	民間	9	仕事	6	聞く	5
船内	24	アルコール	8	使う	6	幕僚監部	5
部隊	24	タイバックスーツ	8	出す	6	戻る	5
ウイルス	21	汚染	8	乗り込む	6	要請	5
派遣	21	下船	8	装備	6	要領	5
考える	17	患者	8	着脱	6	翌日	5
生活	17	教育	8	注意	6	スーツ	4
乗客	16	健康	8	当初	6	スペース	4
新型	16	見る	8	不安	6	チャーター	4
着用	16	現地	8	本部	6	ニュース	4
医療	15	指導	8	予防	6	ポイント	4
行う	15	脱ぐ	8	陽性	6	医師	4
日本	15	調整	8	PCR	5	印象	4
思う	14	ゾーン	7	ゴーグル	5	拡大	4
出る	14	テープ	7	ブーツ	5	感じる	4
入る	14	機関	7	移動	5	慣れる	4
災害	13	救急	7	可能	5	基本	4
対応	12	区域	7	開始	5	期間	4
対策	12	検査	7	環境	5	帰国	4
脱衣	12	個室	7	境界	5	交換	4
任務	12	個人	7	広がる	5	交代	4
確認	11	高い	7	作業	5	国内	4
訓練	11	指	7	指揮	5		
検疫	11	指示	7	実践	5		
今回	11	持つ	7	手洗い	5		
実施	11	手	7	宿泊	5		
情報	11	手袋	7	準備	5		
徹底	11	受ける	7	状況	5		
防衛	11	設ける	7	状態	5		
コロナ	10	船	7	世界	5		
管理	10	搬送	7	席	5		
業務	10	必要	7	設置	5		

て、自衛隊は危機的な状況下での迅速かつ効果的な対応を可能にした。運用管理についてのキーワードは、船内での生活管理（16回）、任務の遂行（12回）、業務の調整（9回）、特定の場所や個室（6回）での作業は、ダイヤモンド・プリンセス号の特別な環境下での効果的な運用管理を実現した。情報共有と訓練面のキーワードは状況確認（11回）、情報共有（11回）、訓練実施（11回）、教育（8回）と指導（8回）を通じて、自衛隊は対応能力を高め、組織としての効率と効果性を向上させた。病原体対策についてのキーワー

ドは新型コロナウイルスへの具体的な対策として、ウイルスの検疫（11回）や検査（7回）が重視された。これにより、感染の早期発見と拡散防止に効果的に寄与した。環境整備におけるキーワードは、現場や現地（8回）での環境整備、民間（9回）や他の機関（7回）との連携は、総合的な対応と資源の最適な活用を可能にした。健康管理についてのキーワードは、健康管理（7回）と心理的サポートに焦点を当て、隊員の健康状態を確実にチェック（7回）した。

2) コロナ下の奇跡共起ネットワーク分析 (図2)

KH coder を用いて、最小出現数7、上位60に設定し共起分析を行った。その結果、自衛隊が最も大きな円で表されていることから、「自衛隊」というテーマがデータセットにおいて非常に重要であり、多くの他の要素と関連していることが示される。また「対策」は「感染」と直接的な強い関連を持ち、「感染防止対策」の文脈で共に語られることが多いことを示す。「自衛隊」は「防護」や「対策」とも実線でつながっており、このデータセットでは自衛隊が感染症対策において防護対策が重要な役割を果たしていることを示唆する。その他のキーワードは、サイズが小さく、点線でつながっているものもあるが、これらは「感染」「対策」「自衛隊」と関連はあっても、中心的なテーマほど頻繁には言及されていないか、あるいは関連性が比較的弱いことを意味する。

図2を見ると「訓練」「教育」「現場」「見る」が1つにネットワークグループとなっている。また「アルコール」「消毒」「マスク」「タイベックスーツ」「徹底」も1つのネットワークグループとなっている。自衛隊では指揮命令系統、個々人の任務が明確に示されており、現場での教育訓練と実施確認が行われていた。そのため自衛隊の平時における、規律厳守と訓練が、新型コロナウイルスの初期段階におけるダイヤモンド・プリンセス号のケースで重要であった。

次に、「アルコール」「消毒」「タイベックスーツ」「マスク」のグループでは、ダイヤモンド・プリンセ

ス号の感染は、コロナ感染拡大前であったため、十分な量の防護服、マスク、手袋、消毒液などの物資が利用可能であったことが、感染の拡散を防ぐ重要な要因となった。しかし、図2の「方面」「衛生」「部隊」「情報」といったネットワークグループがあるように、衛生に特化した部隊が派遣され、専門知識を持って、感染管理が行われていた。

物資の充分性は感染対策の基盤を形成するが、それを支えるのは人的要素、すなわち訓練された人々の適切な行動と決断である。ダイヤモンド・プリンセス号での事例は、資材の重要性とともに、危機管理の人的側面の重要性も強調している。

自衛隊の対応は、規律と訓練がパンデミック対策において重要であることを示している。自衛隊員は、防護装備の適切な使用、手洗いや消毒の徹底など基本的な感染予防策を厳格に守り、ウイルスの拡散を最小限に抑えることに成功した。彼らの行動は、チームとしての一体感と、個々人の責任感に基づいていた。

3. 研究Ⅲ：アンケート結果と KH coder を用いた対応分析

図3は、自衛隊の新型コロナウイルス対応に関するアンケート結果と書籍「コロナ下の奇跡」をコード化して記述データを分析した結果を示している。その結果、自衛隊の活動とコロナウイルスとの関連性が示されている。図中で「クルーズ船」に関連するキーワードが中心に位置し、この活動が大きな焦点であったこ

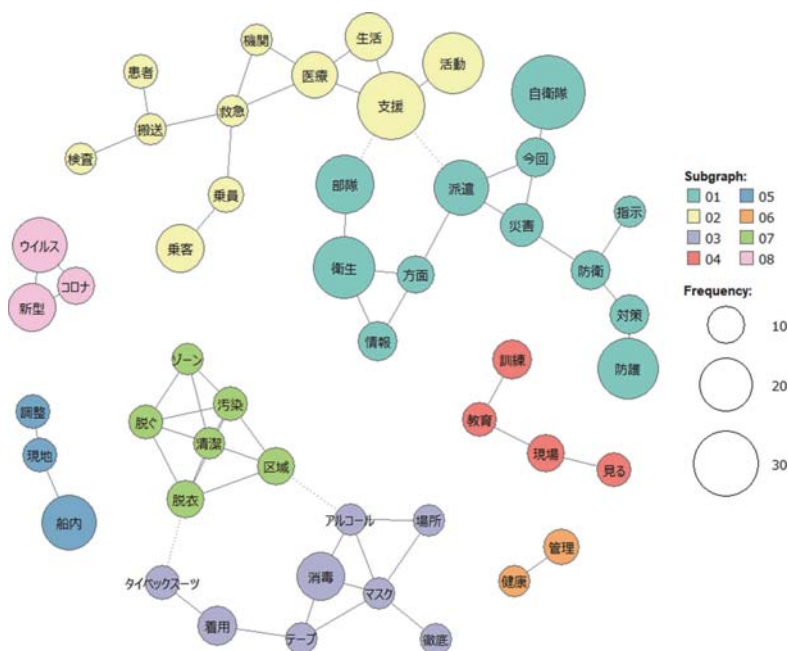


図2 コロナ禍の奇跡共起ネットワーク

Ⅶ. 結 論

- 1) 感染対策の徹底について、自衛隊は防護服の着用、消毒作業の徹底、マスクや手袋の使用、清潔さの維持、アルコール消毒などの感染予防措置を厳格に実施していた。
- 2) 自衛隊の規律と徹底された訓練が、感染予防措置の適切な実行とプロトコルの厳守を可能にし、感染拡大を防ぐ重要な役割を果たした。
- 3) 自衛隊は医療支援から災害対応、患者搬送、救急対応まで、多岐にわたる活動を展開し、迅速な対応を実現した。
- 4) 自衛隊の組織的なアプローチが効果的であったことが確認され、組織としての効率と効果性の向上に寄与した。

Ⅷ. 終 わ り に

本研究を通じて得られた教訓は、将来の感染症発生時における継続的なリスクマネジメントに活用されるべきである。特に、密閉された環境や大規模施設での感染予防と管理戦略を再評価し、必要に応じて更新することが重要である。自衛隊の迅速かつ効果的な対応は、危機管理の成功事例として他の緊急事態対応組織にも示唆を与えるものである。

Ⅸ. 本研究の限界と今後の課題

コロナの影響とは言え、研究参加者が5名となり、書籍を加えても一部の隊員からの結果となった。そのため一般化については課題を残した。また、今後の課題としては、他の事例などの追加情報を得て、さらに感染対策に関する好事例から、研究結果を一般化することである。自衛隊においては、2021年4月、長崎県でもクルーズ船「コスタ・アトランチカ号」の新型コロナウイルス感染症クラスターが発生したが、このときも自衛隊の災害派遣隊員は感染者を出すことなく任務を終了した。

謝 辞

本研究にご協力いただいた防衛省統合幕僚監部広報

課の担当官様へ深く感謝申し上げます。また、本研究において貴重な書籍を提供し、研究の深化に寄与してくださった石高健次氏のご厚意に深く感謝申し上げます。

利益相反 (COI)

本研究に関して、筆者に開示すべき利益相反はない。

引 用 文 献

- 防衛省 (2020). 防衛白書 令和2年版, 「見えない敵 (新型コロナウイルス) との戦い~二次感染者ゼロの達成」. [閲覧日 2024/2/3]. URL: <https://www.mod.go.jp/j/publication/wp/wp2020/html/nc014000.html>
- 防衛省 (2020). 新型コロナウイルス感染拡大を受けた防衛省・自衛隊の取組. [閲覧日 2022/2/3]. URL: https://www.mod.go.jp/j/approach/exchange/area/2020/pdf/20200417_fra-j_gaiyo-1jp.pdf
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析, ナカニシヤ出版, 155-157.
- 石高健次 (2021). コロナ下の奇跡 —— 自衛隊中央病院 衝撃の記録 ——, 南々社, 36-81.
- Michael Greenacre 著 (2017), 藤本一男訳 (2020). 対応分析の理論と実践 —— 基礎・応用・展開, 1-14.
- ジョンズ・ホプキンス大学 (2020). 新型コロナウイルス世界の感染者数, リアルタイム報告 2020. [閲覧日 2020/10/23]. URL: <https://coronavirus.jhu.edu/map.html>
- 国立感染症研究所 (2020). ダイヤモンドプリンセス号における COVID-19 症例. [閲覧日 2024/2/3]. URL: <https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov/2484-idsc/9410-covid-dp-01.html>
- 厚生労働省 (2020). 令和2年2月20日クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」内の感染制御策について. [閲覧日 2024/2/3]. URL: https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/newpage_09646.html
- MAMOR (2020). 2020年8月2020年出版, 大日本印刷.
- 日本放送協会 (NHK) NEWS WEB (2020). 新型コロナ世界の感染者 2020年10月 [閲覧日 2024/2/3]. URL: <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201026/k10012681631000.html>
- 東洋経済 ONLINE (2020). 「クルーズ船集団感染」研究で突き止めた真犯人ダイヤモンド・プリンセスを襲った空気感染. [閲覧日 2024/2/3]. URL: <https://toyokeizai.net/articles/-/366956>
- 夕刊フジ (2020). 「なぜ自衛隊から感染者はでなかったのか」. [2024/2/3]. URL: <https://www.zakzak.co.jp/article/20200519-U2JTIS3YUJK45II7EQ5RFXGQGA/>